



海連

<海連>

所有者 船長 今給黎教子

1989年フィンランドBaltic社造船 1991年世界一周用改造
全長10,64m 全幅3,5m 重量5t マスト高14m 喫水1,8m

1991年 10月12日 ~ 1992年 7月15日

単独無寄港世界一周航海 成功

<おんなひとりぼっち どこにも寄らない 地球一周>

航海距離 約6万キロ 航海日数 278日

日本人初の単独無寄港東回り世界一周航海（西回りは大先輩堀江謙一氏が1974年成功）
女性ではオーストラリアの方に次いで2人目

- 鹿児島市城山ホテルで上架展示
- 東京・大阪・名古屋にて上架展示
- 鹿児島県一周・世界一周応援感謝航海
- 各地・海の学校で青少年育成
- 各地・海のイベントで体験航海 船内見学会
- 乗船人数 約5万人 見学人数 約100万人



～＜海連＞と名付けた想い～

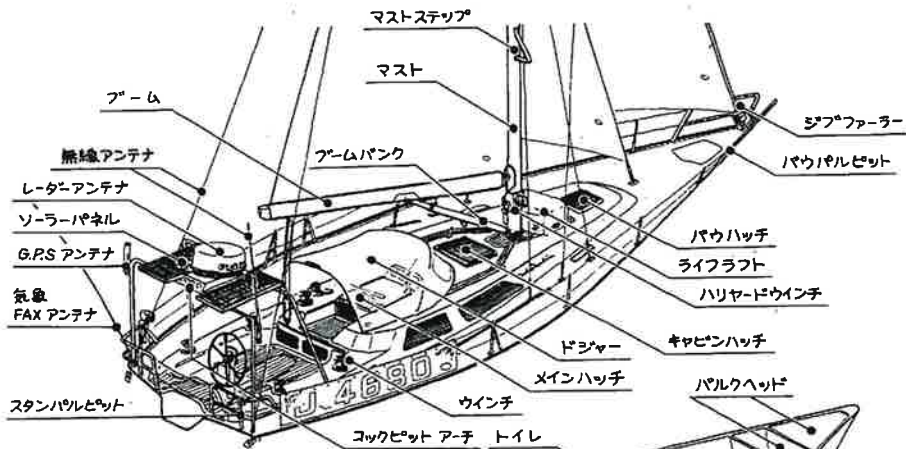
いつかヨットを持ち大きな海への航海を夢見ていた私に、母が一枚の便箋を仏壇の中から取り出し見せてくれた。48歳で癌で死んだ父の美しい字。それは海の壮大な世界を描いた詩だった。「若い時のね、父さんからのラブレターよ」と母は笑った。父「連」から、母「海子」への恋文・・・父が死んだのは私が10歳の時。海で泳ぎや釣りやすすべての海の魅力を教えてくれたのは、海の大好きな父だった。この二人がいたからこそ今の私が存在している。いつか自分のヨットを持てたら父母に感謝を込めて「海連」と名付けよう、父の海への想いと共に航海しよう、世界の海を連ねて行こう、と心に決めた。

海

無限の深さをたたえ
渺々として 然も大地を包合し
万国の岸边に波の花咲く
内に宝庫を秘め
大小船縦横の航行を扶ける
又人心を動かし人目をいやす
一旦風雲襲来せば
怒涛逆巻き 巖も砕き
船もみじんに人命も絶つ
旭光を生み 落陽を呑む
偉大なるかな
海 海 海の威力よ

連

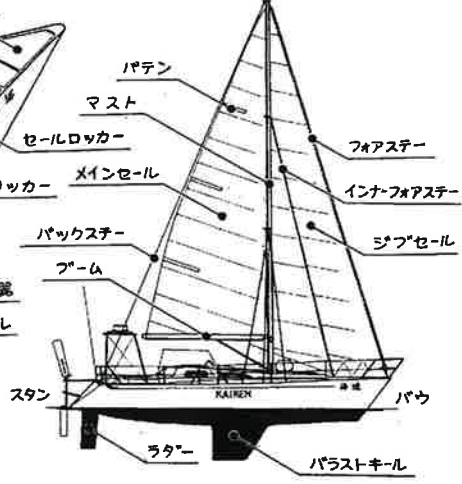
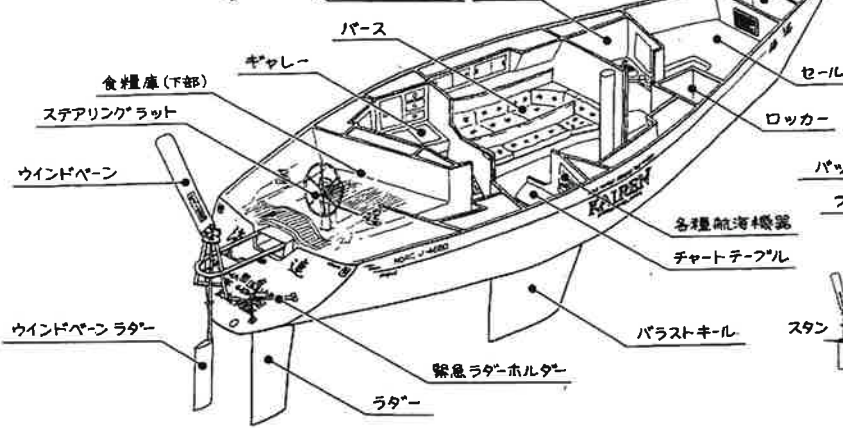
<世界一周ヨット 海連>



海連 KAIREN

NORC J4680
BALTIC 35 (KMS RIG)

全長	10.64 m
水線長	8.75 m
最大幅	3.50 m
喫水	1.80 m
キール重	1.88 t
自重	4.48 t
積載時	6.48 t
マスト高	14.00 m
最大帆面積	58.26 m ²





1990年春、私は単独無寄港世界一周航海への挑戦を決意する。

世界各海域や風波の状況、国の状況を調査。東南アジアは海賊の危険あり。陸地の政情や人間の方が危険。陸の危険から離れた方が良いだろう。各国のパイロットチャートで世界中の気象状況を丹念に追い、日本から日本への東回り航海に決める。日本人が誰もやっていない航海、他国でも北太平洋からの航海記録もなく、手本はない。太平洋の南北航海以外は南極一周にも近いルート、高緯度海域の航海になるため、北半球南半球の夏付近を追いかけなければならない。東回り約3万マイルを風まかせのヨットでの航海、平均4-5ノット、1日100-120マイル、誤差を考慮しても9-10ヶ月の航海になるであろう。その前提で、私には35-40ftの大きさのヨットが妥当であり、航海実現のためヨットをさがし始めた。頑丈、速度、私の体格体力技術で対応出来るヨットの選定と整備。

信頼するヨット仲間でもありヨット整備のプロである剥岩政次氏（現鹿児島マリンサービス代表・日本セーリング連盟外洋南九州顧問）に依頼する。航海者は私だが信頼出来る技術者が絶対に必要だ。

1990年11月、フィンランドのBaltic社のヨットが条件に合っている、と剥岩氏から提案。

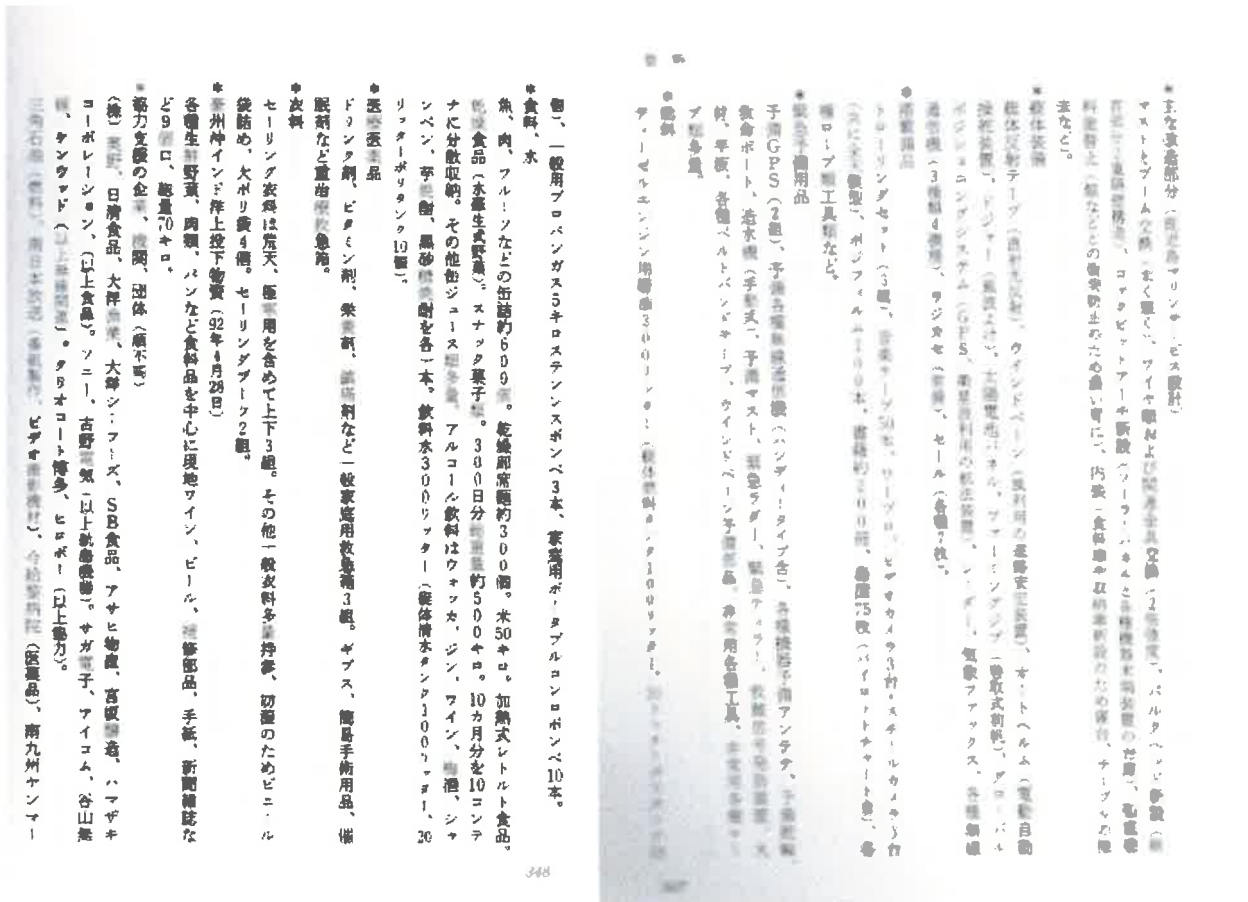
日本のヨットや海外製のヨットは、その頃はFRP単板が多く、太陽の光で喫水線が透けて見えるほど。氷山や鯨などの漂流物に衝突する危険を考慮した際には心許なかった。

フィンランドに行き、実際に工場見学しビルダーの方々と世界一周の意見交換。まずは女性では無理だろうと笑われてしまったが、Baltic社は名前のお通り、バルティック海という非常に厳しい海域で船を建造しているだけあって、質実剛健、世界一頑丈な船を作り上げている誇りを経営者もビルダー（職人）も持っていた。しかし、1隻のヨットを作り上げるのに実に4-5年かかるという。私の目指す航海のためのヨットを特注で建造するには時間がかかりすぎる。しかも、新艇はおそろしい金額だった。

1990年12月、Baltic社の35ftヨット中古艇ありとの話が大阪から来る。国内の中古艇はありがたい。

船体は申し分なく頑丈だが、マストやブーム諸々「女性が1人で長距離を長期航海する」ものに大幅な変更が必要だった。冒険航海のために特注しても、プロダクションボートを大幅改造しても、どちらも多大な費用はかかる。私は決断した。その35fヨットで世界一周しよう！

1991年初頭、鹿児島に到着した＜海連＞Baltic35ftの途方もない改造整備が始まった。前代未聞の航海へ、全てが試行錯誤だった。大幅な改造、装備品、搭載品は下記の通り（航海記録より）。





＜船体＞ Baltic35 造船所: Baltic Yachts フィンランド デザイナー: Judel/Vrolijk
 バルサコアとグラスファイバーマットを使用したサンドイッチ船体構造。エポキシバキューム工法を用い、非常に耐航性が高く断熱性に優れ、かつ軽量。内装も機密性を高め居住性を重視。Baltic社が手がけた最小ヨットで1984年から2001年まで45隻建造された。

＜整備・改造・装備・デザイン＞ 鹿児島市 鹿児島マリンサービス 剥岩政次
 マスト・ブームなどリギン新設（船体との接続部の補強）および帆の製作
 水密隔壁新設
 ウインドベーン（風力を用いた自動操縦装置）取付
 オートヘルム（電力を用いた自動操縦装置）取付
 GPS、気象FAX、無線機、イーパブ、レーダー、取付
 太陽光パネルとレーダーやアンテナのためのアーチ新設
 波よけドジャー取付
 緊急用アウトラダーと受け部の製作
 緊急用マストの製作

